

# PISA型読解力の育成を目指す中学校社会科歴史的分野の単元開発

## —地域の博物館を活用して—

堀内 和直\*

### Constructing History Lesson Unit in Junior High School to Develop PISA Model Reading Literacy: Using Regional Museums

Kazunao HORIUCHI

#### 概要

2000年PISA調査の問題を分析すると、PISA型読解力の中でも、日本として育成を目指すべき苦手とするものの1つは、字数1300字程度の連続型テキストで、理由を問う自由記述の問題であると言える。

社会科においては、単元全体として、連続型テキストとともに写真や実物を教材とした学習活動を展開する必要がある。そこで、社会科歴史的分野におけるPISA型読解力の育成を目指すには、連続型テキストと写真や実物を備えるとともに、専門家としての学芸員がいる博物館の活用が有効である。

そこで地域ゆかりの人物である足利義材を取り上げ、射水市新湊博物館の展示室解説を活用することで、PISA型読解力の育成を目指す授業実践が可能であることが分かった。しかし、熟考・評価のプロセスを問う問題を取り上げた単元を開発することなどの課題が残った。

キーワード：PISA型読解力、中学校、歴史教育、博物館

Keywords：PISA Model Reading Literacy, Junior High School, History Education, Museum

## I. はじめに

本稿の目的は、地域の博物館を活用してPISA型読解力の育成を目指す中学校社会科歴史的分野の単元開発を行うことである。まず、先行研究や2000年PISA調査<sup>(1)</sup>の問題を分析し、テキストと社会科の授業との関係や博物館の活用の意義を考察したい。そして、地域の博物館を活用した中学校社会科歴史的分野の単元を開発したい。

## II. 方法

### (1) 先行研究の分析

先行研究から社会科における読解力育成の課題を考察した。

### (2) PISA 調査の問題の分析

2000年PISA調査をもとに、詳細な分析が可能な公表されている問題のみを分析の対象とした。PISA型読解力の中でも、日本として育成を目指すべき苦手とするものを、読解力問題の正答率及び無答率について、日本とOECD平均を比較し、日本の方が5ポイント以上低い及び高い小問であると考え、これを抽出した。次に抽出した小問について、テキストの形式、プロセス、出題形式

を分析した。またテキストの情報量、小問のプロセスの詳細を分析した。

### (3) テキストと社会科

テキストと社会科の授業との関係を考察した。

### (4) 単元開発と博物館

本稿における単元の開発と博物館との関係を考察した。

### (5) 地域の博物館を活用した中学校社会科歴史的分野の単元開発

射水市新湊博物館を活用した小単元「戦国時代のはじまり」を開発した。

### (6) 授業実践

以下の対象者及び実施期間、実施場所で行った。

- ・対象者 2009年度富山大学人間発達科学部附属中学校第1学年3組40名
- ・実施期間 2009年12月～2010年1月
- ・実施場所 第1学年3組教室

## III. 結果

### (1) 先行研究の分析

これまで、読解力の育成を目指す社会科の先行研究は

\* 富山大学人間発達科学部附属中学校

いくつか見られる。成果としては、社会科あるいは歴史学習における読解力を定義し、定義に基づいた授業実践を行っている。<sup>(2)</sup>しかし、課題としては、読解力に関する詳細な調査が行われた2000年PISA調査の問題分析がほとんどなされていない<sup>(3)</sup>ため、行われた授業実践が国際的な視野から見て、日本が苦手とする読解力を育成するものかがはっきりしない。

## (2) 2000年PISA調査の問題分析

### ①日本とOECD平均の正答率と無答率の比較

2000年PISA調査で公表されている読解力問題は全部で44問ある。これらの問題の正答率及び無答率について、日本とOECD平均を比較し、日本の方が5ポイント以上低い及び高い小問を抽出すると、資料1～3のようになる。

まず正答率(資料1)については、日本の方が5ポイント以上低い小問は4問ある。テキストの形式はすべて連続型、プロセスはすべて解釈、出題形式は選択肢と自由記述がそれぞれ2問ずつある。

次に無答率(資料2)については、日本の方が5ポイント以上高い小問は11問ある。テキストの形式は連続型が9問に対して非連続型が2問であり、圧倒的に連続型が多い。プロセスは熟考・評価が7問に対して、解釈が4問で、熟考・評価がやや多い。出題形式はすべて自由記述である。

### ②テキストの分析

資料1・2からも分かるように、日本が苦手とする小問に関係するテキストは、「警察」「インフルエンザ」「贈り物」「落書き」「新しいルール」の5つである。5つのテキストについて、情報量にあたる字数を分析すると、字数の少ないものから、903字(「落書き」)、915字(「インフルエンザ」)、1318字(「新しいルール」)、1558字(「警察」)、4419字(「贈り物」)となっている。平均すると1822.6字であるが、贈り物だけが字数が大幅に多く開きがあるため、中央値をとると、1300字程度となる。生徒が使用している教科書では、本稿に関連するある見開き2ページの本文を見ると、文字数は845字である。<sup>(4)</sup>見開き2ページというのは、通常1時間(50分)の授業で進む程度の分量である。ということは、テキストの情報量は、少なくとも1時間の授業で使う教科書の字数以上のかかなり多めの字数のテキストを使う必要があると言える。

### ③小問の分析

資料3を見ると、日本の方がOECD平均より正答率が5ポイント以上低く、なおかつ無答率も5ポイント以上高い小問は2問あり、2問とも解釈のプロセスを問う問題となっている。解釈とは、書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり推論したりすることである。<sup>(5)</sup>熟考・評価も日本が苦手とするプロセスであるが、これについては別稿に譲り、本稿では正答率・無答率両方から日本が苦手とする解釈のプロセスを問う

小問のみを取り上げる。

無答率の高い順に解釈のプロセスを問う小問を紹介すると、以下の通りである。

- 「この物語では、この女性がヒョウに食べ物を与えた理由を暗示しています。それは何ですか。」(「贈り物」問5)
- 「ソフィアが広告を引き合いに出している理由は何ですか。」(「落書き」問2)
- 「子の冷凍受精卵の着床の例にあるように、新しい技術によって、どのようにして新しいルールが必要となったかを説明している実例を、この社説の中から二つ挙げてください。」(「新しいルール」問2)
- 「物語の後半で起こったことを考えると、著者はヒョウを登場させるにあたって、なぜこういう書き方をしたのでしょうか。あなたの考えを述べてください。」(「贈り物」問3)

全4問のうち、「贈り物」の2問と「落書き」の1問の計3問は、理由を問うている。

### ④日本として育成を目指すべき苦手とする問題

上記の①～③から、PISA型読解力の中でも、日本として育成を目指すべき苦手とするものの1つは、字数1300字程度の連続型テキストで、理由を問う自由記述の問題であると言える。

## (3) テキストと社会科

### ①連続型テキストと社会科

新学習指導要領では、中学校社会科の各分野の目標に様々な資料を活用することが明記されている。例えば、歴史的分野では、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に関する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。」<sup>(6)</sup>とある。この趣旨を踏まえて社会科各分野では、様々な図表や地図、グラフなどの非連続型テキストを主たる教材として学習活動が展開される。<sup>(7)</sup>

そのためか、読解力向上に関する指導資料<sup>(8)</sup>には、中学校社会科の指導例が3つ紹介されているが、テキストは、すべて非連続型である。

しかし、PISA型読解力の中でも、日本として育成を目指すべき苦手とするものの1つが、連続型テキストを使ったものであることから、社会科でも連続型テキストを教材とした学習活動をもっと展開していく必要がある。<sup>(9)</sup>

### ②社会科と社会認識

ただし、社会科で連続型テキストを教材とした学習活動をもっと展開するというのは、連続型テキストだけを数多く教材として使って学習活動をするということではない。なぜなら、それだけでは社会科の目的の1つである社会認識を十分に育成できないからだ。<sup>(10)</sup>

社会認識を育成するとは社会について知るはたらきを持たせる<sup>(11)</sup>ことであり、社会についての記号を多くの

対象を指し示すものとして解釈させることである。<sup>(12)</sup>

宇佐美氏は、記号とはそれ以外の何ものかを解釈者に知らせるものであり、実物である非人工物と、ことば、写真のような人工物に分かれる。前者を信号、後者を象徴という。象徴はさらに、写真のように物理的性質を共有し、指示対象である実物に似ている現示的象徴と、ことばのように実物に似ていない論述的象徴に分けられる、という。<sup>(13)</sup>

あることばが解釈されるためには、そのことば以外の情報が必要であり、その情報が別のことばである場合でも、そのことばが解釈されるためにはさらに別の情報といったように、どこかで、ことばでない経験から情報を得ることが必要である。<sup>(14)</sup> つまり、どこかの部分で写真のような現示的象徴や実物のような信号から情報を得ることが必要であるということである。

だから、「戦国時代」のようなことばを解釈させる場合、「戦国時代」ということば以外の情報が必要であり、どこかで、ことばでない経験からの情報が必要となる。もし、写真や実物があれば、ことばの解釈はより容易になる。

ということは、連続型テキストを教材とした学習活動だけでは、ことば以外の写真や実物から情報を得ることができない。となると、「戦国時代」のようなことばを十分に解釈することができないので、社会科の目的である子どもの社会認識を育成するには十分とは言えなくなる。

このように社会科としてPISA型読解力の育成を目指す単元開発を行うためには、連続型テキストだけでなく、写真や実物を教材とした学習活動を展開する必要がある。だから、日本として苦手とするPISA型読解力の育成を目指すためには、字数1300字程度の連続型テキストを用いた学習活動を行う必要があるものの、単元全体としては、社会認識を育成するために、テキストを補う写真や実物を準備する必要があると言える。

#### (4) 単元開発と博物館

新学習指導要領は、社会科でテキストとして活用する資料に、地図、年表、新聞、読み物、統計を挙げているが、この中で連続型テキストは新聞、読み物である。<sup>(15)</sup>

社会科歴史的分野での学習活動として考えた場合、新聞は古い新聞、読み物は人物の伝記といったふうに連続型テキストとして活用することは可能である。

しかし、新聞や読み物を連続型テキストとして社会科の単元開発を行った場合、写真や実物を準備する必要がある。また、連続型テキストや関連する写真や実物といった教材の学問的なことについて専門的に確認する機会も必要となるが、専門的な知識がない教員だけでは確認が困難である。そこで、本稿では、連続型テキストと写真や実物を備えるとともに、学芸員により教材の学問的なことについて専門的に確認することが可能な博物館を活用した単元開発を提案したい。

博物館とは、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」である。<sup>(16)</sup>

展示は、一次資料としての実物資料だけでなく、それを説明する解説（キャプション）、写真、模型、複製（レプリカ）、映像など様々な二次資料によって構成される。特に、歴史展示の場合は、歴史を語る物的証拠としての古文書や絵画などの一次資料を並べただけでは、よほどの専門家でない限り、その資料が持つ歴史的意味や価値がわからないので、説明文やその他補足する二次資料が必要になってくる。<sup>(17)</sup> そのため、一般の人が分かるように教育的配慮がなされた展示室解説が作られている。

このように、博物館は、教育的配慮がなされた展示室解説が連続型テキストとして活用できるだけでなく、写真や実物を準備しやすい。

また多くの博物館には学芸員が配置されており、学問的なことについて専門的に確認することが可能である。こういったことから、社会科歴史的分野におけるPISA型読解力の育成を目指した単元開発には、博物館の活用が有効であると言える。

#### (5) 地域の博物館を活用した中学校社会科歴史的分野の単元開発

##### ①射水市新湊博物館の概要

射水市新湊博物館は、本校のある富山市に隣接する射水市の博物館で、国指定重要文化財の「高樹文庫」資料を中心に地域の歴史、芸術文化、生活などに関わる資料を保管・展示している。かつて越中の守護所が置かれた放生津（現射水市）の歴史や民俗も紹介している。本校からかなり離れており交通の便も悪いため、生徒が授業時間中に博物館へ行って調査することは難しい。

##### ②足利義材<sup>(18)</sup>と戦国時代のはじまり

足利義材は室町幕府第10代将軍で、1493年に部下である守護の細川政元が起こした明応の政変によって事実上京都から追放されて越中の放生津に逃れ、以後5年間越中に滞在した歴史上の人物である。詳しい資料はほとんど残っていないが、足利義材の様子については、博物館では展示パネルや展示室解説によって紹介されている。

上記の明応の政変は、幕府体制の解体の画期をなすものであり、同年には、北条早雲の堀越公方御所攻略事件も起きていることから、この1493年が政治史上の戦国時代のはじまりの年とされている。

##### ③テキストと問い

テキストは、連続型である足利義材についての博物館の展示室解説を用いた。テキストの字数は1397字と、日本が育成を目指すべき苦手とする字数に近い。難しい漢字にはルビもあり、内容も一般の人がわかるよう教育的配慮が施されている。

問いは、「10代将軍足利義材が富山にいたのはなぜか」とし、理由にあたる部分に線を引かせるとともにそこに引いた理由を答えさせた。最後には自由記述の形式になるよう2文にまとめるようにした。

#### ④写真

足利義材の銅像が写っているパネルを準備した。この銅像は射水市内に置いてあり、パネルは射水市新湊博物館からお借りした。導入でこのパネルを見せることで、まず生徒に地域ゆかりの身近な人物であることを実感させた。そして、武器を持ち、馬に乗っている勇ましい将軍の姿をより具体的にイメージさせ、そんな人物が部下によって追放されたことを文書で確認させることで、戦国時代のはじまりと結びつけるようにした。

#### ⑤単元開発

ア 小単元名「戦国時代のはじまり」

イ 小単元の目標

- ・10代将軍足利義材が富山にいたことに興味をもつ。
- ・資料をもとに10代将軍足利義材が富山にいた理由を考えることができる。
- ・嘉吉の乱・応仁の乱では、将軍の権威を認めていたことを読み取ることができる。
- ・明応の政変によって将軍の権威が無視され、戦国時代がはじまったことを理解する。

ウ 授業展開

第1次 10代将軍足利義材が富山にいたのはなぜか、資料をもとに話し合い、まとめる。(第1・2時)

第2次 足利義材の追放が戦国時代のはじまりといわれるのはなぜか、資料をもとに話し合い、まとめる。(第3時)

#### (6) 授業実践の概要

第1時では、銅像が写っているパネルを見せ、生徒が持っている資料集で射水市に置いてある10代将軍足利義材の銅像であることを確認した。生徒は、将軍が富山にいたことをはじめて知り驚いていた。そして、足利義材が5年間富山にいた理由を予想した。予想では、追放された、鎌倉時代と同じように朝廷と対立していた、富山に親しくしている部下がいるなどの意見が出た。

第2時では、射水市新湊博物館の展示室解説をもとに、理由にあたる部分に線を引き、その理由を答えた。そして、2文以内にまとめてワークシートに書いた。書いたものを皆で出し合い、クラスで検討しあった。最後に、2文で「義材と仲が悪かった細川政元に攻められ、京都に幽閉されたが脱出した。その後、力をたくわえ、政権を回復するために、義材が将軍になるのに助けを得た越中守護畠山政長の有力家臣のいる富山にやってきたから。」だということを確認した。

第3時は、まず1441年の嘉吉の乱は、将軍権力の強化をめざし、有力守護を相次いで殺害した6代将軍義教が、処罰を恐れた部下の有力守護赤松氏により殺害されたで

きごとであること、赤松氏による義教の殺害は、赤松氏の個人的なうらみから偶然発生したものであり、赤松氏が将軍の権威を無視する気はなかったことを確認した。

次に1467年からの応仁の乱は、9代将軍や有力守護大名の後継ぎをめぐる争いであること、東軍は、将軍邸を占拠して義政・義尚・義視の身柄を確保したため、戦いを有利に展開したこと、将軍は東軍にもりたてられながらも、超越的地位を誇ることができ、西軍は将軍の敵であるということひげめを感じていたことを確認した。そして上記の2つの出来事では、少なくとも将軍の権威は認められたことを読み取った。

しかし、1493年の明応の政変では、部下の細川政元には将軍の権威を無視する気持ちが生まれており、義材は京都を事実上追放された。このように、これまで認められていた将軍の権威が、明応の政変では無視され、下の者が上の者を実力で倒していこうとしている。このことから、将軍の権威を無視した部下の細川政元による足利義材の追放が、下の者が上の者を実力で倒していこうとする戦国時代のはじまりであると言えることを理解した。

なお、第1時で使った足利義材の銅像が写っているパネルとPISA型読解力の育成に関わる第2時の黒板の写真を資料4、展示室解説を資料5、第2時の授業記録を資料6に示す。

## IV. 成果と課題

成果としては以下の4つが挙げられる。

1つ目は、2000年PISA調査の分析により、PISA型読解力の中でも、日本として育成を目指すべき苦手とされるものは、字数1300字程度の連続型テキストで、理由を問う自由記述の問題であることが明らかになったことである。今回開発した歴史的分野に限らず地理的分野や公民的分野でも十分に応用できる。

2つ目は、社会科教育学や記号論の分析から日本として育成を目指すべき苦手とするPISA型読解力の育成を社会科で行う場合、社会科の目的を踏まえ、連続型テキストだけでなく、写真や実物を教材とした学習活動も展開しなくてはならないことが明らかになったことである。社会科としてPISA型読解力の育成に特化した学習活動に陥ることなく、社会科の目的を踏まえ、社会認識を育成していく必要がある。

3つ目は、新学習指導要領や博物館学の分析により、社会科歴史的分野におけるPISA型読解力の育成を目指す単元開発には、連続型テキストと写真や実物を備えるとともに、専門家としての学芸員がいる博物館の活用が有効であることが明らかになったことである。PISA型読解力と博物館との関係が明らかになったことで、重要性が指摘されている博物館の活用<sup>(19)</sup>が今後ますます期待できる。

4つ目は、授業実践をしたことにより、博物館の展示室解説を活用することで、PISA型読解力の育成を目指す授業実践が可能であることが明らかになったことである。展示室解説は、博物館側が特に中学生を対象に作成したものではないが、中学生でも十分に読解が可能な教材となった。

課題としては以下の4つが挙げられる。

1つ目は、2000年PISA調査の分析で日本が苦手とするものが明らかになったものの、本稿ではできなかった熟考・評価のプロセスを問う問題を取り上げた単元開発を行うことである。熟考・評価とは、テキストに書かれていることを生徒の知識や考え方や経験と結びつけることである。<sup>(20)</sup> 社会科の目的も踏まえ、開発を行っていきたい。

2つ目は、上記の成果の1つ目でも取り上げたが、地理的分野や公民的分野での単元開発を行うことである。新学習指導要領で挙げられている新聞や読み物を活用した開発が考えられるが、他の教材も探してみたい。

3つ目は、展示室解説の活用について、本稿では射水市新湊博物館のものしか取り上げていないことから、他の博物館の展示室解説を活用した単元開発を行うことである。またその際、博物館の学芸員とも協力しながら展示室解説そのものを開発することもできると思われる。このことによって、社会科における博物館の活用もますます盛んになることが期待できるだろう。

4つ目は、時代の特色をつかむ学習活動にどう結びつけていくかである。新学習指導要領では、中世や近世といった大きな時代の特色をつかむ学習活動を展開するよう求めているが、<sup>(21)</sup> 今回開発した単元がどう結びつくのかを明らかにしていく必要がある。

今後の課題としたい。

## 謝辞

小単元の導入で使ったパネルをお貸しいただき、丁寧な助言をいただいた射水市新湊博物館の松山充宏学芸員はじめ博物館の関係者の方々には、この場を借りて御礼申し上げます。

## 【注】

- (1) 国立教育政策研究所編 (2002) 『生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2000年調査国際結果報告書』株式会社ぎょうせい
- (2) 以下のものが挙げられる。
  - ・青山雄一郎 (2009) 「社会科学習における『読解力』の意義と役割—公民的分野『国際問題と地球市民』の授業実践をふまえて—」埼玉大学社会科教育研究会『埼玉

玉社会科教育研究』No.15 11～27頁

- ・馬野範雄・井上伸一 (2008) 「社会的読解力を育成する社会科授業の構想」社会系教科教育学会『社会系教科教育研究』第20号 1～9頁
- ・關浩和・原田智仁・米田豊・吉水裕也・小寺研・高山宗寛・新宮真也・戸出彰男 (2010) 「社会科固有の『読解力』形成のための授業構成と実践分析 (I) —関係性を重視したマップ活用の視点から—」『学校教育研究』第22巻 63～75頁
- ・寺尾健夫 (2008) 「出来事を社会的に読み解く力を育成する歴史授業」『福井大学教育実践研究』第33号 41～52頁
- (3) 鈴木氏は、調査問題のテキストを分析しているものの、2003年のものを使用している。鈴木雄治 (2006) 「読解力を高めるための表現力育成の課題—中学校社会科地理的分野『身近な地域』における地図の読図と作図を手がかりに—」東京学芸大学社会科教育学会『学藝社会』第22号 29～44頁。2003年PISA調査については、国立教育政策研究所編 (2007) 『生きるための知識と技能 2 OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003年調査国際結果報告書』株式会社ぎょうせい 参照
- (4) 「全国が分裂した戦国時代」黒田日出男他編 (2006) 『社会科 中学生の歴史』帝国書院 72～73頁
- (5) 前掲書 (1) 30頁
- (6) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 社会編』68頁
- (7) 吉開潔 (2009) 「PISA型「読解力」向上への取組 中学校・社会科の実践の在り方〈成果と課題〉」田中孝一監修『中学校・高等学校PISA型「読解力」—考え方と実践—』明治書院 76頁 参照
- (8) 文部科学省 (2008) 『読解力向上に関する指導資料—PISA調査 (読解力) の結果分析と改善の方向』東洋館 参照
- (9) 吉開氏は、社会科と国語科がより緊密に連携してPISA型読解力を高めていくことを期待し、社会科において連続型テキストの一層の活用を求めている。前掲書 (7) 78頁 参照
- (10) 片上宗二 (2006) 「社会科の目的」森分孝治 片上宗二編集『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書 110頁 参照
- (11) 知るはたらきだけでなく、その結果としての知識も含まれる。岩田一彦 (2006) 「社会認識」同上 26頁 参照
- (12) 宇佐美寛 (1988) 『思考指導の論理』明治図書 28頁 参照
- (13) 同上 17～18頁 参照
- (14) 前掲書 (12) 34頁 参照
- (15) 前掲書 (6) 46頁 参照
- (16) 博物館法第2条、石森秀三 (1999) 『博物館概論』

(財)放送大学教育振興会 12頁

(17) 竹内有理 (2008)「博物館教育の実践①：展示へのアプローチ」佐々木享他『博物館経営・情報論』(財)放送大学教育振興会 148頁 参照

(18) 展示室解説の題名の人物名は「足利義材」だが、他に義尹、義植と改名しているため、どの時点の名前を採用するかで、人物名が異なっている。生徒の発言にも義材と義植の両方が見られ、資料4の黒板にも義植と書かれているが、本稿では、混乱を避けるため義材に統一した。

(19) 前掲書(6) 90～91頁 参照

(20) 前掲書(1) 30頁

(21) 前掲書(6) 11～14頁 参照

#### 【授業内容に関して参照した文献】

- ・新湊の歴史編纂委員会 (1997)『しんみなとの歴史』新湊市
- ・富山県 (1984)『富山県史通史Ⅱ中世』
- ・勝俣鎮夫 (1996)『戦国時代論』岩波書店
- ・鈴木良一 (1974)『応仁の乱』岩波書店
- ・五味文彦・本郷和人編 (2004)『中世日本の歴史』(財)放送大学教育振興会
- ・佐藤信他編 (2009)『詳説日本史研究』山川出版社
- ・帝国書院編集部編 (2009)『中学校スタンダード歴史資料－富山県版－』帝国書院

(2010年8月31日受付)

(2010年10月6日受理)

## 資料1 日本の正答率がOECD平均より5ポイント以上低い小問

問題の名称	小問	テキストの形式	プロセス	出題形式	正答率全体		
					日本	OECD平均	日本-OECD
警察	問3	連続型	解釈	選択肢	50.4	80.5	-30.1
インフルエンザ	問3	連続型	解釈	選択肢	38.8	53.9	-15.1
贈り物	問5	連続型	解釈	自由記述	42.6	56.6	-14.0
落書き	問2	連続型	解釈	自由記述	42.2	53.4	-11.2

## 資料2 日本の無答率がOECD平均より5ポイント以上高い小問

問題の名称	小問	テキストの形式	プロセス	出題形式	無答率全体		
					日本	OECD平均	日本-OECD
贈り物	問5	連続型	解釈	自由記述	38.8	12.5	26.3
インフルエンザ	問2	連続型	熟考・評価	自由記述	41.9	21.6	20.3
贈り物	問7	連続型	熟考・評価	自由記述	40.7	20.8	19.9
落書き	問2	連続型	解釈	自由記述	28.8	10.2	18.6
落書き	問4	連続型	熟考・評価	自由記述	27.1	13.9	13.2
新しいルール	問2	連続型	解釈	自由記述	47.7	35.8	11.9
贈り物	問3	連続型	解釈	自由記述	29.6	18.1	11.5
インフルエンザ	問4	連続型	熟考・評価	自由記述	22.9	12.3	10.6
プラン・インターナショナル(※)	問2	非連続型	熟考・評価	自由記述	39.8	29.7	10.1
落書き	問3	連続型	熟考・評価	自由記述	15.2	6.8	8.4
チャド湖	問3	非連続型	熟考・評価	自由記述	24.7	17.9	6.8

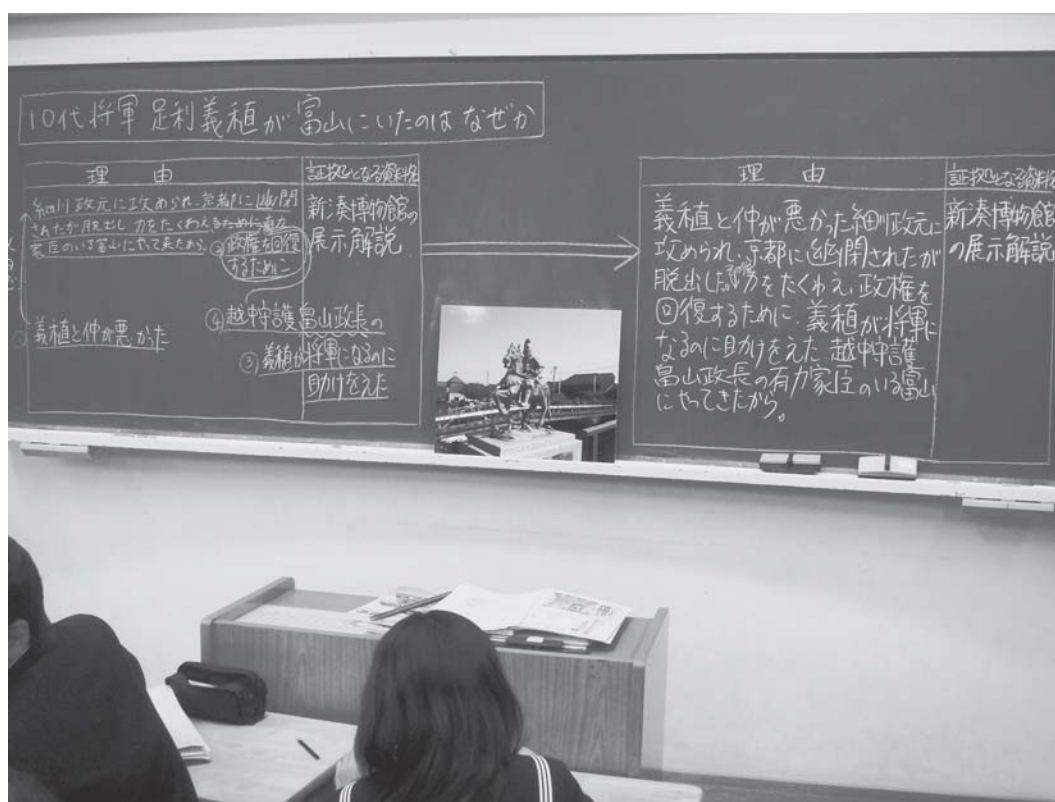
※プラン・インターナショナルの問1も公表されているが、問2と組み合わせて採点されているため、単独のデータはない。

## 資料3 資料1・2の両方に当てはまる小問

問題の名称	小問	テキストの形式	プロセス	出題形式	正答率全体			無答率全体		
					日本	OECD	日本-OECD	日本	OECD	日本-OECD
贈り物	問5	連続型	解釈	自由記述	42.6	56.6	-14.0	38.8	12.5	26.3
落書き	問2	連続型	解釈	自由記述	42.2	53.4	-11.2	28.8	10.2	18.6

資料1・2・3とも、国立教育政策研究所編(2002)『生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 2000年調査国際結果報告書』株式会社ぎょうせい より作成。テキストの形式、プロセス、出題形式で使っている用語については、左記の文献のものをそのまま用いた。なお、出題形式について、「自由記述」は、2000年調査では「論述形式」となっている。2003年、2006年では、「自由記述」という名称が使用されていることから、「自由記述」とした。

資料4 足利義材の銅像のパネル（上）と第2時の黒板の様子（下）





## 資料5 展示室解説

博物館資料 No22

### 展示室1 解説 放生津にきた室町幕府10代将軍 足利義材

展示室1に入ると、戦国時代の放生津に5年間滞在した将軍 足利義材を紹介するコーナーがあります。義材は「銀閣」を立てた8代将軍足利義政の甥です。

義材は、文正元(1466)年7月30日に生まれました。当時、幕府内は大名による主導権争いが続いていました。そして、8代将軍義政の後継ぎをめぐり、義政の子義尚と義政の弟義視をそれぞれ推す大名たちが対立し、応仁元(1467)年から11年間にわたり、京都周辺で合戦が続きました(応仁の乱)。その後、9代将軍となった義尚が早世したため、延徳2年(1490)7月5日に義視の子である義材が、越中の守護大名である畠山政長の助けをえて10代将軍となりました。

しかし、義材や政長と仲が悪かった丹波(京都府)守護細川政元は、明応2年(1493)4月に反乱を起こし、義材のいとこを将軍に立てました。政元は河内(大阪府)にいた義材と政長を攻め、政長は自害、義材は捕らわれて京都に幽閉されました。ところが6月に義材は京都を脱出し、越中(富山県)の放生津へやって来たのです。放生津には、政長の有力家臣である神保長誠がいました。長誠は寺を改装して将軍御所としました。御所には能登(石川県北部)の畠山氏、加賀の富樫氏(石川県南部)、越前(福井県東部)の朝倉氏、越後(新潟県)の上杉氏ら守護たち、奉公衆・奉行人などの幕府の役人約70人、将軍と朝廷の間を取り持つ公家衆、宗教行政や財政に関わる禅僧が集まりました。越中武士の遊佐氏、椎名氏、土肥氏らも義材を助けました。人々に支えられ、義材は引き続き将軍として振舞い、幕府の命令を伝える公文書を発し、義材の幕府政権は、越中御所・越中公方と呼ばれました。

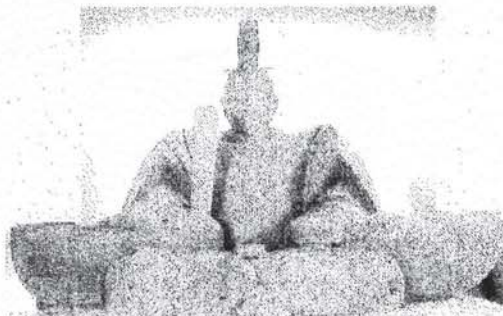
東山文化のリーダーである室町将軍を迎えた放生津は、空前絶後の繁栄を迎え、陸奥(福島県)の有力大名である白河結城政朝ら各地の武士、飯尾宗祇など多くの文人も訪れました。その様子は、宗祇の句集や義材に同行した歌人伊勢貞仍の歌集「下総集」に書きとどめられています。

放生津で力を蓄えた義材は、細川氏に政権を返すよう交渉するため、明応7年(1498)越前へ移りました。しかし交渉は失敗し、義材は京都を攻めます。しかし義材は破れ、周防(山口県)の守護大内氏を頼りました。永正5年(1508)6月、義材は大内氏と京都に攻め込み、政権を回復しました。その後、義材は政争に巻き込まれて大永3年(1523)4月9日、阿波(徳島県)で亡くなりました。墓所は阿南市の西光寺にあり、子孫は平島公方と呼ばれ、文化2(1805)年に京都へ移るまで同地に留まり、儒学者や僧侶など文化人が集まる名家として栄えました。

義材は、諸国を巡る旅で出会った人々を思い出し、慈悲の心を反映した政治を目指したこと(『塵塚物語』)や、将軍御所を襲った賊を自ら太刀をとり撃退した(『実隆公記』永正6年10月条)などの逸話が残されています。

富山県内には、義材が政権回復を祈り修築させた雄山神社前立社壇本殿(立山町岩峯寺・国指定重要文化財)、雄山神社中宮祈願殿若宮社殿(同町芦峯寺・同町指定文化財)、義材が持参した天神像をまつる天神山(魚津市)、義材が2カ月滞在したという小川寺(魚津市)などがゆかりの地として知られています。

なお、義材は、越中を去った後、義尹、ついで義禎と改名しています。



足利義材(義禎)像(京都府 等持院 蔵)



足利義材の花押

射水市新湊博物館

〒934-0049 富山県射水市鏡宮 299

Tel:0766(83)0800 Fax:0766(83)0802

## 資料6 小単元「戦国時代のはじまり」の授業記録

1 実施 富山大学人間発達科学部附属中学校 第1学年3組

2 展開 (小単元全3時間中2時間目のみ)

主な指示・発問	生徒の反応
1 10代将軍足利義材が富山にいたのはなぜか、新湊博物館の展示室解説を参考に考えてみよう。	
2 課題の答えだと思われる部分に線を引いてみよう。	
3 どこに引いたかな。～段落、～行目かと引いた理由を教えてください。	T・M「しかし、義材や政長と仲が悪かった丹波(京都府)守護細川政元は、明応2年(1493)4月に反乱を起こし、義材のいところを将軍に立てました。政元は河内(大阪府)にいた義材と政長を攻め、政長は自害、義材は捕らわれて京都に幽閉されました。ところが、6月に義材は京都を脱出し、越中(富山県)の放生津にやって来たのです。放生津には政長の有力家臣である神保長誠がいました。」に線を引きました。細川政元と仲が悪く、政元に攻められ京都に幽閉されたが、有力家臣が越中の放生津にいたからです。
4 引いたのは全部で7文です。これを2文以内にまとめてワークシートに書いてみてください。	S「越中の守護大名である畠山政長の助けをえて10代将軍となりました。ところが、6月に義材は京都を脱出し、越中(富山県)の放生津にやって来たのです。放生津には政長の有力家臣である神保長誠がいました。」「越中武士の遊佐氏、椎名氏、土肥氏らも義材を助けました。」に線を引きました。神保氏だけでなく、他の武士も義材を助けたから富山にいたと思います。
5 I君、黒板に書いてください。	Y「放生津で力を蓄えた義材は、細川氏に政権を返すよう交渉するため、明応7年(1498)越前に移りました。」に線を引きました。富山で力を蓄えることができたから。
6 これでいいですか。	I 黒板に「細川政元に攻められ、京都に幽閉されたが脱出し、力を蓄えるために、有力家臣のいる富山にやってきたから。」と書く。
7 力をたくわえ、になるよね。	K 有力家臣の前に政権を回復するためにを入れた方がよい。
8 細川政元に攻められたのはなぜ。	K はい。
9 有力家臣って誰の。	M 義材と仲が悪かったから。
10 なぜ畠山政長の有力家臣のところへ行くの。	T・K 越中守護畠山政長の。
11 なぜ一緒に攻撃されたところに行くの。	T・K 義材と一緒に細川政元に攻撃されたから。
12 じゃー、この順になるね。(赤字で数字を書いて線を引く。)	I 義材が将軍になるのに、畠山政長の助けを得たから。
13 こちらにまとめてみるね。どうかな。	T・K 長い。
	T・N「脱出し」後に「た。その後」と加えれば。